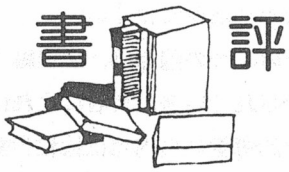
https://rodosoken.com/



三好　正巳著

『産業労働論序説』

仲村　政文

1970年代から「コンピュータ革命」「情報革命」などが喧伝されたことは、記憶に新しい。そして、80年代にはME革命が急激に展開したことも、よく知られていることである。このような展開は現代の技術革新を特徴づけており、また、今日の生産力構造の歴史的性格を根本的に規定している。この現実を前にして、多くの調査・分析がなされてきたが、それらの多くは体系性に乏しいといわざるをえない。

このようななかにあって、注目すべき労作が刊行された。本書がそれである。まず、本書の構成をみると(構成は方法を示す！)、次のとおりである。

I　産業労働論の課題と方法
　1章　産業労働論の成立
　2章　産業労働論の課題と分析方法
　3章　産業労働論の構成
II　産業労働論の基礎理論
　1章　社会的生産の発展と産業の展開
　2章　資本の蓄積と産業労働
　3章　ブルジョア社会と産業労働
III　生産システムと産業労働
　1章　相対的剰余価値生産の発展と生産方法の変化
　2章　生産方法の変化とシステム産業的分業
　3章　生産システム化と労働様式

みられるとおり、ここでは理論と現状分析とが統一的に展開されている。その内容をみると、まず、第I編では産業労働論を展開するうえで不可欠の基本的範疇（概念）として、労働方法、生産方法、労働様式、生産様式などが重層的に提示され、それぞれについて著者の見解が示されている。評者のばあい、生産方法と生産様式とは同じものであり、その基本的モメントは労働手段（の社会的体系）とこれに規定される労働の社会的編成とである。

いずれにせよ、ここではこれらの範疇(概念)が明確にされたうえで、産業労働論の課題が明らかにされる。著者によれば、産業労働は労働の社会的生産力およびその発展の問題として「解かれねばならない」。このことは、別の箇所で「産業労働論は、相対的剰余価値の生産が発展するにともなって変化する生産方法において、したがって、労働手段と労働方法の変化がはなはだしい生産方法の変革について、それがもたらした生産手段の集中と労働の社会化とが、資本主義の生産様式と調和しなくなる過程の解明を課題としている」(26ページ)とも述べられている点と連なっている。総じて『資本論』第7編第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を今日的視点から明らかにしようとする意図がうかがえる。史的唯物論の方法が意識されているということもできよう。

第II編では生産の一般的性格や生産と分配、交換、消費との関連などが明らかにされた後に、賃労働としての産業労働の展開構造が資本の循環定式（G－W…P…W'－G'またはP…W'－G'－W…P）と蓄積過程とに即して解明されて

https://rodosoken.com/

いる。そして、〈マニュファクチュア〉→〈機械と大工業〉→〈「もう一つの階梯」=現代資本主義の生産様式〉というように、生産様式の段階区分（階梯）が示される。このばあい、現代の生産様式の規定的なモメントはメカトロニクス機器とシステム産業であり、そのメルクマールはCNC工作機械の出現である。CNC工作機械の出現が決定的な意味をもつのは、それは機械系から自立した制御系（制御機構）を内包しているからである。労働手段の発展段階の区分(画期）に関するこのような理解は通説とも一致しており、問題はない。

問題は労働手段の発展段階に規定されるところの資本による労働の包摂の形態をどのようにみるかということであり、その労働の価値形成をどのように理解するかという点である。この問題に関連して著者は次のようにいう。生産様式の階梯差は「労働が、資本に包摂される実態によって、形態的包摂、実質的包摂、そこからの離脱の開始、労働の二重性にかかわり価値概念のゆらぎを起こす労働様式として区別される」（155ページ）と。

ここには二つの重要な論点が含まれている。ひとつは資本による労働の包摂の形態は機械段階とは異なるということである。この点はマルクスのいう「労働はもはや生産過程に内包されたものとしては現れないで、むしろ人間が生産過程それ自体にたいし監視者ならびに規制者として関係する」(『経済学批判要綱』)という論点とも重なり合っている。評者も同じ見地に立っているが（ただし、道具段階から機械段階への変化のほうがより革命的であると考えている)、いずれにせよ、それを「〔資本による包摂からの〕離脱の開始」とするのは曖昧である。もうひとつの論点は、価値形成の在り方が異なるということである。この点を著者は「価値概念のゆらぎ」というように、曖昧に表現しているので、ここでも少しばかりわかりにくい。

しかし、以上の二つの論点は、第Ⅲ編へと引き継がれ、敷行されている。著者によれば、工場現場の「基幹的労働」の内容は情報労働であり、「主たる労働」は「機械装置を操作するためのプログラムを作成する労働」にほかならない（240ページ)。したがって、共同労働（協業）の在り方も大きく変わる。生産のシステム化、情報システムによる統括が展開し（CIMをみよ)、相対的剰余生産も「新たな協働段階」を迎えることになるのである。協働の空間的な「広がり」がみられるという点では労働の社会的結合が「拡大」することになる。一方、労働手段の「役割」の圧倒的な「増加」という事態が進展するので、著者によれば、資本が労働過程を「直接に支配する」ことに「技術的な制約」があるというのである。

このようにして、先の価値概念の「ゆらぎ」の問題は、最終生産物に対する情報労働の有用性の希釈化の故に、有用労働として投下される労働時間によって、価値量を秤量することが「困難」になる、という点に帰着することになる。

このような議論のすすめ方は明解であるが、なお論証すべき論点が多く残されている。そして、この論証にあたっては、先に引用した叙述(『経済学批判要綱)に関連してマルクスが展開している論述が参考になるといえよう。さらにいえば、生産力の発展は「究極的にはつねに、活動させられる労働の社会的性格に、社会内部における分業に、精神的労働の発展、とくに自然科学の発展に、帰結する」(『資本論』)とするマルクスの叙述が参考になろう。今日、科学の「生産力化」が急展開しており、それは情報労働の問題に限定されない広がりと深さとをもっている。したがって、科学的労働、技術的労働、

https://rodosoken.com/

直接的労働の階層的な編成とそれぞれの価値形成力の相違が具体的に吟味される必要があろう。

本書にはなお未解決の論点がいくつか残されているが、これらの解明はひとり著者のみでなく、専門を同じくする研究者すべてに共通する課題である。独自の見解を縦横に展開しつつ(ここではその一端をみるに留まったのだが)、ひとつの明確な道筋をわれわれに提示したことの意義は計り知れないといえよう。

(法律文化社・1993年12月刊・7210円)

(鹿児島大学教授)

『嶋津千利世著作選集』

柴田　悦子

1．婦人労働問題研究の草分け

嶋津千利世さんが、戦中・戦後から90年代に至る約半世紀をかけて研究を続けてこられた婦人労働問題に関する論文を、3冊の『嶋津千利世著作選集』として出版された。戦後日本の女性労働問題を勉強しようとする時、まず読んだのが嶋津さんの諸論文であった。嶋津さんの諸論文は、働く女性の実態を調べ、その状態が日本資本主義経済の発展とどのように関連し、資本の蓄積構造の中へ組みこまれていくかを解明していく点で共通性を有している。女性労働問題をいわゆる「婦人問題」としてみるのではなく、つねに資本主義経済の発展と矛盾の中でとらえる。その中に男女差別とたたかい、平等への道を歩もうとする婦人労働者たちのエネルギーの分析を行っていく。このような方法論が、働く女性、学生、共働き、主婦、研究者といった広い層に「嶋津婦人労働論」の学習を広めてきた理由と思われる。私も若い頃『女子労働者』(岩波新書、著作選集第Ⅰ巻)を読んで刺激と感動をうけた一人である。とくに戦争中、紡績工場へ学徒動員されていた私は、特別の親しみを持って『女子労働者』を読んだ。

戦後まだ婦人問題研究に若い研究者の関心がむいていない時期、嶋津さんは草分けとして大きな役割を果された。婦人問題に関心を持つ研究者は、嶋津さんの論文には必ず目を通し、現場で差別とたたかっている女性労働者たちは自分たちの理論武装のために嶋津論文が必要であった。嶋津さんの研究は、そのあと'90年代に至る40年以上にわたる長期間、各時代に展開される婦人政策や労働政策との関連で婦人問題の理論化をすすめていく。嶋津論文の特徴の一つには女性労働の分析、理論化に際して、つねにその時代背景を歴史的に明確にした上で行われることであろう。このことは、差別を取り扱う理論家にしばしば見られる理念の空転を退け、比較的難解な内容をくだいて説明することで理解を容易にするのである。

『著作選集』全三巻は、問題別・年代順に編集されている。第Ⅰ巻は先にあげた『女子労働者』(1953年)を中心に、戦後婦人労働と婦人労働問題研究の特質を70年代初期までを範囲にまと